

興味ある非還納性陰嚢ヘルニアの1例

昭和33年11月15日 受付

信州大学医学部第一外科教室(主任: 星子直行教授)

山中 元 石井金助 金丸 敬

A Rare Case of Inguinal Hernia Accompanied with Meckel's Diverticle

Hajime Yamanaka, Kinsuke Ishii and Kei Kanemaru

Department of Surgery, Faculty of Medicine,
Shinshu University

(Director: Prof. N. Hoshiko)

最近メッケル氏憩室を伴う腸管を内容とする左非還納性陰嚢ヘルニアで、たまたま魚骨が憩室壁を穿通してヘルニア嚢内に出ていた興味ある一例を経験したので報告する。

症 例

患者は1年7ヶ月の男児で、家族歴、既往歴には特記すべきことは認められない。

現病歴 生后40日頃、医師に左陰嚢ヘルニアと診断されたが、特に異常がなかつたので何等処置することもなく経過した。昭和32年4月16日頃麻疹に罹り安静中、4月20日の夜中より手拳大に腫大した左陰嚢に疼痛を訴え、嚢内容は非還納性となり、気味悪く、嘔吐はなかつたが食慾不振が続ぎ、4月23日当科を訪れた。

来院時所見 体格中等度、栄養やゝ不良、顔貌苦悶状、発熱37.5°C、脉搏118、皮膚は汚穢赤褐色で乾燥し、全身の諸所に落屑が認められた。聴診により気管支炎の所見を認めたが、血液、尿所見その他には特に異常はなかつた。

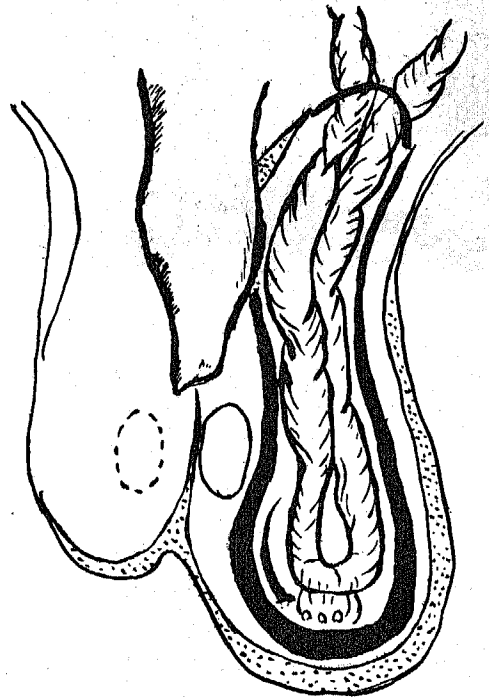
局所々見 左陰嚢は手拳大に腫大して、左鼠径部より下垂して梨子状を呈し、その表面の皮膚皺壁は消失し平滑で、下端1/3に発赤を認め、同部に熱感があり、陰嚢内容物は比較的硬く、波動、透光性はなく、微かながら腸管雑音を聞き、陰嚢下端部に示指頭大の不規則な形の、皮膚と癒着した硬い部分があり、同部を圧迫すると、特に強い疼痛を訴える様であり、陰嚢の正中線よりの中央部に、小指頭大の墨丸を触れた。左陰嚢内非還納性乃至は嵌頓ヘルニアの診断のもとに即日入院手術を行った。

麻酔 気管支炎の所見があつたので、吸入麻酔をさき、術前にラボナールの分割筋注を行い、1%キシロカインの局所麻酔を併用して手術を行った。

手術所見 左鼠径部より左陰嚢の一部にわたる約4cmの皮膚切開を加え、ヘルニア嚢を開く。ヘルニア内は約3横指の大きさがあり、内容は廻腸で、嵌頓の

所見は認められなかつたが、少量の漿液性、やゝ血性をおびたヘルニア水が認められた。腸管係蹄の一部は、ヘルニア嚢の基底部に癒着しており、その正中側で、腸管外に針状の堅い異物を触れたので、取出したところ、長さ約3cm、軽度に彎曲した魚骨であつた(図1, 2)。次でこの癒着を鈍性に剝離し、腸管を創外に翻転すると、癒着していた部分は、径2.5cm長さ3cmの円筒状の廻腸憩室で、憩室の先端部は憩室炎の所見を呈していた。魚骨はおそらくこの部分を穿通して腸管外に出たものと思われた。よつて先づこの憩室を頸部より切除し、断端を縫合閉鎖し、腸管を腹

図1. 手術時所見略図



腔内に還納したのち、バツシー氏法によつて、型の如くヘルニア根治手術を実施した。術後陰嚢内に軽度の血腫を形成したが次第に縮少し、術後第11日目に治癒退院した。病理組織学的検査では、切除部は廻腸粘膜でおゝわれ、廻腸の全層を認め廻腸と交通している。壁は肥厚して強い炎症性細胞殊に好酸球の浸潤が強く、またこの部に魚骨の破片らしいものが認められた(図3)。本症例は、臨床所見及び組織学的所見より、メツケル氏憩室と考えられる。

図2. 摘出標本写真

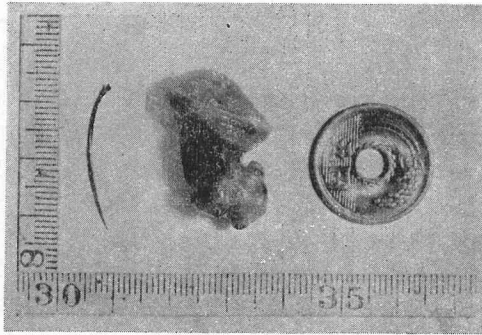
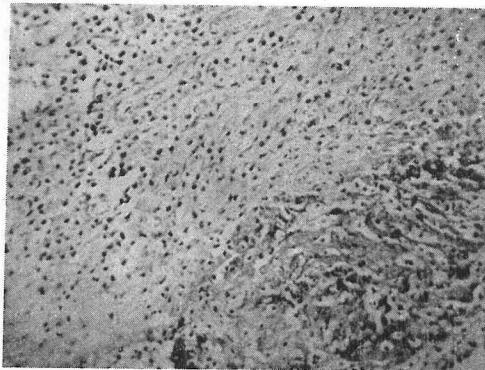


図3. 組織頭微鏡写真



考 按

メツケル氏憩室は1812年 Meckel が発生学的立場よりその病理を解明したものである。本邦でメツケル氏憩室の臨床症状を呈したものは、土屋^①の集計によれば、234例に達し、その後吾々が集め得た症例報告及び吾々の1例を加えると、263例になる。本症の頻度は、剖検例では Sloan^②によれば、1%に認められ、開腹例では Mcglauman^③は0.02%, Umphrey^④は0.26%に認めている。本邦では中原^⑤等は0.17%, 若山^⑥は0.24%に認めている。憩室に伴う病変の主なもの、腸閉塞、憩室炎、ヘルニア等で、他に出血、潰瘍、腫瘍、異物等がある。263例を分類すると、腸閉塞が最も多く160例、次で憩室炎38例、ヘルニア23例その他である。メツケル氏憩室を内容とするヘルニアの症例は、自験例を含めて23例で、多くは嵌頓ヘルニアを惹起している。23例の分類は次の如くである(表1, 2)。

瘍、腫瘍、異物等がある。263例を分類すると、腸閉塞が最も多く160例、次で憩室炎38例、ヘルニア23例その他である。メツケル氏憩室を内容とするヘルニアの症例は、自験例を含めて23例で、多くは嵌頓ヘルニアを惹起している。23例の分類は次の如くである(表1, 2)。

表1. メツケル氏憩室による病変

Wellington (326例)		本邦例 (263例自験例を含む)	
1 腸閉塞	144	1 腸重積	26
2 腸重積	59	2 その他の腸不通症	134
3 急性憩室炎	50	3 急性憩室炎(慢性憩室炎)	38
4 ヘルニア	27	4 ヘルニア内容	23
5 臍に開口するもの	21	5 潰瘍出血	9
6 軸捻転	9	6 軸捻転	7
7 チフス瘻孔	2	7 腫腸	6
8 外傷による瘻孔	2	8 外傷	4
9 小腸脱出	3	9 臍瘻	5
10 潰瘍瘻孔	2	10 その他	11
11 骨盤腫瘍	1	11 不明	2
12 嚢腫	1		

表2. メツケル氏憩室を内容とするヘルニアの分類(自験例を含む)

右鼠径ヘルニア	7
左鼠径 "	5
右陰嚢 "	4
左陰嚢 "	2
右股 "	1
臍部 "	1
手術瘻痕(虫垂炎)ヘルニア	1

一方憩室内異物としては、Blance^⑦大原^⑧が魚骨例を、Fontaine^⑨等は針の例を報告している。またヘルニア嚢内異物としては、土生^⑩は右陰嚢ヘルニアで蛔虫を認め、荻野^⑪は腸穿孔による右鼠径ヘルニア嚢に柿の種子を認め、増田^⑫は待針を含んだ虫垂を嚢内容とした右不還納性ヘルニアの1例を報告し、Pearce^⑬もヘルニア嚢内に遊離魚骨を認めた1例を報告している。しかしながら、本症例の如くメツケル氏憩室を伴う腸管と憩室を穿通して腸管外に出たと思われる魚骨を嚢内容とし、しかも憩室炎を起し、ヘルニア嚢と癒着して非還納性となつたような複雑な症例は、吾々の調査した範囲では見出し得なかつた。

結 論

1年7ヶ月の男児で、メツケル氏憩室を伴う腸管を内容とする左非還納性陰嚢ヘルニアで而も魚骨が憩室壁を穿通してヘルニア嚢内に出ていた1例を経験したので、併せて文献的考察を試みた。

御校閲を賜った星子教授、岩月助教授並びに組織学的所見につき御教示を賜った第一病理学教室石井教授に深謝します。

参考文献

- ①土屋、豊田：臨外 11：309, 昭31 ⑤Sloan, R. D. et al: Am. J. Roentgenal 71: 64, 1954
 ③McGlauman, A.: Surg. Gynec. & Obst. 35: 142, 1922 ④Umphrey, C. E.: J. Michigan M. Soc. 46: 805, 1947 (①より引用) ⑥中原、柳川：グレンツゲビート 10: 1358, 昭11 ⑩若山：日本医科大学雑誌 18: 155, 昭26 ⑦Blance, H: Zbl. f. chir 1251, 1899 ⑧大原：日外会誌 36: 2350, 昭10 ⑨Fontaine, R. Baner, R.: Zbl. f. chir. 61: 109, 1934 ⑪土生：臨外 9: 47, 昭29
 ⑫荻野：グレンツゲビート 9: 1243, 昭10 ⑬増田：医療 9: 275, 昭30 ⑭Pearce, A. E. et al: Am. J. Surg, 86: 751, 1953